２０２３年3月１２日　Ｎｏ.３６５８　週報上掲載

先週の講壇から　　〝多くゆるされた人〟

ルカによる福音書　7章36節～50節

聖句「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」(7:47)

１．《歪んだ鏡》　オウム真理教が「東京地下鉄サリン事件」を起こした時、識者から「カルトは私たちの社会の鏡」との発言がありました。現在、統一協会やエホバの証人が槍玉に上げられていますが、同様の発言が聞かれません。日本社会の劣化を思います。どんなに歪んでいるとしても、日本社会を映し出す「鏡」なのです。私たちと無関係ではなく、地続きなのです。

２．《関係ある》　教会の案内ビラ等に「私たちは、統一協会、エホバの証人、モルモン教とは一切関係がありません」の一文が添えられています。「関係ない」と述べるのは容易ですが、余りにもお粗末です。むしろ「私にも関係がある」「この問題とも繋がっている」と捉えるのが大人の意識です。ペトロが「私は関係がない」と否認したことも思い出されます。イエスさまは「サマリア人の譬え話」の結びに「この３人の中で、強盗に襲われた人の隣人になったのは誰か？」と問われました。それらの事を思えば、直ちに分かります。「関係ある」と考えるか、それとも「無関係」と考えるか、それが信仰と不信仰との別れ道なのです。

３．《沢山の愛》　私の友人のＢ牧師は、キリスト教主義の高校で「聖書科」を教えています。生徒たちの「聖書なんて、何の関係があるの？」という率直な反応を、神さまから自分への問い掛けと受け止めて、「生きることを一緒に考えてみましょう」と訴えています。自己肯定感の薄い子どもたちの姿を通して、少ししか愛されず、不安を抱える現代人の生を思うのだそうです。「聖別された者」であるファリサイ派にとっては「罪の女」は「汚らわしい」存在で、関わり合いには成りたくありませんでした。でも、彼女は愛だけを携えて、主の御もとに来ました。イエスさまは、ありのままの彼女を認め、丸ごと受け止め、彼女が生きることを赦して下さったのです。赦しの根拠は「彼女は多く愛したから」でした。

朝日研一朗牧師